法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

ドイツ都市のトルコ人集中街区に見るドイツ人とトルコ人との関係 : 1970年代と1980年代の状況

YAMAMOTO, Kenji / 山本, 健兒

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
66
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
71
(終了ページ / End Page)
111
(発行年 / Year)
1998-10-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002604

ドイツ都市のトルコ人集中街区に見る ドイツ人とトルコ人との関係

——1970年代と1980年代の状況——

山　本　健　兒

目　次

1.　はじめに
2.　1970年代
3.　1980年代
4.　おわりに
注
文献

1.　はじめに

移民は，その受け入れ国において差別を受けがちである。移民に対する差別には，国籍あるいは市民権の存否に関わる制度的なものと，住民間の日常的な接触あるいは非接触から生まれるものとにひとまず区分できよう。この2種類の差別の間に，いかなる関係があるかを問うことに，意味がなくはない。しかし，両者をないまぜに議論することは，差別という問題の理解や，その解決のためには有益とならない。

新保満（1972，pp. 2-4）によれば，人種間あるいは民族間の偏見とは，問題となる民族に対してあまり根拠なく非好意的に判断する態度のことであり，そうした「誤った，そしてあまり弾力性のない一般化…(中略)…を

心の中で感じたり口に出していったり」し，その「一般化をグループ全体にあてはめる」態度のことを言う。新保は，偏見には程度の大小があるが，いずれにせよ態度や感情であり，これが行動に直ちに結びつくとは限らないとした上で，差別とは「特定の社会集団に属する個人を違ったように扱う行動」を意味する，と述べている。(新保満，1972，pp. 11-12)

この新保の「差別」概念理解に従えば，移民に関わる制度的な差別とは，移民の法的地位を理由として，ホスト社会の市民との比較の上で移民にとって不利な行動が，ホスト社会の組織や個人によって取られることを意味する。他方，住民の日常生活のなかから生まれる差別とは，偏見に基づいて移民にとって不利な行動がホスト社会の個人や団体によってとられる行動を意味する。

差別の問題に関しては，山口節郎（1996）も，注目に値する理論的考察を行っている。山口によれば，差別の古典的形態は，生産手段を所有する階級とそれを所有しない階級との間に成立するものである。これに対して，現代的な差別とは，性，年齢，エスニシティ，皮膚の色，社会的出自等の社会的属性に基づいて同一の階級が異なる社会集団に分裂し，このうちのある集団が別の階級と結びついて，同一階級内の異集団を差別する，という構造を呈するところに特徴がある。そのような行動が採られるのは，当該社会に存在する資源・報酬が限られており，これを享受するためには，同一階級内の上記のような指標に基づいて異化できる集団を排除した方がよいと考えられるからである。

この山口による現代的差別の構造理解は，福祉国家イデオロギーを強固に持つ国の方が，市場国家イデオロギーを強固に持つ国よりも，国境の閉鎖性を強化するという Freeman（1986）の考え方に通ずる[1]。もちろん，Freeman は，外国人が国境を越えて流入するという次元での排除の強弱を問題にしているのに対して，山口はすでに同じ国の中に存在している異なる集団間の排除を問題にしているという違いがある点に，留意しておく必要があろう。この２つの次元を見比べることによって，社会的閉鎖が完

全にはなされえない，ということに気づくことができるからである。

つまり，生産手段を所有しない階級に属する成員がすべて，有限の資源の享受から排除されるというわけではない。彼らの中には，享受の側に参入できる者とできない者とがいる。移民にひきつけて言えば，移民しえた者は，ともかくも移民受け入れ国における有限の資源をある程度享受できるのに対して，移民しえない者は，それができない。また，移民しえた者のなかでも，なんらかの契機を通じて，有限の資源の分配をより多く享受しうる者と，より少なくしか享受できない者とへの分解が見られると考えられる。言い換えれば，有限の資源の享受から排除されるといっても，完全に享受できないというわけではなく，享受から排除された人々の間で利用可能な資源というものがわずかとはいえ残存し，これをめぐって異化という排除のための操作が繰り返される。このような入れ子状の排除という重層性を，我々は差別構造の中に認めることができると考えられる。

本稿は，以上のような「差別概念」理解に基づいて，ドイツの都市における，移民とドイツ人との関係の考察を目的とする。制度的な差別を取り上げるのではなく，住民の日常生活の展開のなかから，どのような関係が一般化していくのか，あるいはしないのか，という問題を，街区というロカリティ・スケールの空間で，長期にわたる観察を踏まえて明らかにしたい。ここでいう長期にわたる観察とは，筆者自身による見聞も含むが，それ以上に，上の問題に関わるさまざまな記録を掘り起こし，それを解読するということも含んでいる。

取り上げる街区は，ルール工業地域の西部に位置するドイツ最大の鉄鋼業都市デュースブルク市のブルックハウゼンである。この街区の概要は，本稿では省略する。というのは，この街区をめぐる移民の歴史，ゲットー化の端緒，街区再活性化の市民運動などについて，筆者はすでに一連の論文で明らかにしてきたからであり（山本，1997a, 1997b, 1998），これらの論文を参照していただくことによって，トルコ人移民とドイツ人との間の関係を考える上で，デュースブルク市ブルックハウゼンが重要な事例を

提供しうる，と見て取れるからである。

2. 1970年代

ブルックハウゼンに住むドイツ人と外国人との関係を物語る資料は決して多くない。その数少ない資料のなかで最も初期のものに属するのが，この街区の福音派教会の牧師を1970年代に務めたヘーン牧師の夫人の著書である（Höhn, 1983)。このなかから，当時のトルコ人とドイツ人との関係を指し示す記述をまず紹介しよう。

ヘーン夫人はブルックハウゼンに来てすぐに，福音派教会に所属するL夫人と知り合いになった。L夫人は当時78歳で，ブルックハウゼンで育ち，ここで結婚し，夫と子供たちに先立たれて一人で暮らしていた。ブルックハウゼンを故郷と感じ，この街区をこよなく愛していた。住居はブルックハウゼンの中心部たるアルト・ブッルクハウゼンにあり，すでに1972年1月の時点で，その住宅建物の1階上には，メヘメトという名前のトルコ人が家族と共に暮らしていた。L夫人とメヘメトとは相互によき隣人だった。メヘメトはL夫人のために暖房用の石炭を運びあげてくれたし，またメヘメトの妻が病気の時には，子供たちの面倒を見てくれるようL夫人に，メヘメトが住宅の鍵を渡して頼むという間柄だった。(Höhn, 1983, S. 17)

また，同じ建物に住むあるドイツ人失業者の妻は，メヘメトの家族が皆親切であり，困っているときには助けてくれるし，住宅も清潔に保っている，と評価していた。しかもメヘメトはテュッセン社の高炉，即ち常に高熱の環境にさらされているところで働いているにもかかわらず，酒は一切飲まないと，時々家計の状態も顧みずに飲んだくれる自分の夫と比較するかのように評価していた。(Höhn, 1983, S. 84-85)

このような関係がブルックハウゼンで一般的だったとは必ずしも言えない。しかし，このエピソードは，当時まだこの街区の住民のなかで少数者

だったトルコ人と，ここに前から暮らしていたドイツ人との間の関係が良好だったこと，そしてそれが住人個々人のパーソナリティによっていたことを示唆する。

1973年12月には，ドイツ人トルコ人間関係を示唆する，興味深い新聞報道がなされた（*NRZ* vom 24.12.1973）。この街区で新築された集合住宅に入居したドイツ人家族10世帯と，外国人家族8世帯との間のエピソードである。あるトルコ人家族2世帯が，換気のために玄関のドアを開け放したところ，その住宅から発生した料理の臭いがドイツ人の住宅にも入ってしまった。また，あるトルコ人家族はゴミをしかるべき場所に出さずに玄関の前に置いたままにしたことがあった。これらのことに隣人たるドイツ人たちは苛立たしく思ったというのである。集合住宅の規則はトルコ語で書かれていなかったし，賃貸契約もドイツ語だけで書かれているので，ドイツ人の風習を知らないトルコ人が，ドイツ人との間でコンフリクトを起こすのは無理もないことだった。しかし，上記の新聞によればこのような問題は話し合いによって解決できたとのことである。その話し合いは，相互の言語をほとんど解さないトルコ人婦人とドイツ人との間では，身振り手振りで行わざるをえなかった。しかしともかくも，最悪の事態は発生せずに，ドイツ人家族もトルコ人家族も平和裡に共存する状態が日常化したとのことである。あるドイツ人婦人は，住宅の床を磨かないトルコ人婦人に，床磨き用のワックスを示したところ，直ちにそのトルコ人婦人は理解し，ワックスを購入して床を磨くようになったとのことである。ワックスで床を磨くかどうかということは，ドイツ人が外国人借家人の行動を是とするか非とするかどうかの重要な判断基準であるということもその新聞記事に書かれている。

ブルックハウゼンに住むドイツ人と外国人との間には，上のように，当初小さなコンフリクトが発生したものの，それを次第に解決していったという意味で，ドイツ人と外国人の共存という課題は成功を収めつつある，とその新聞記事は評価している。しかし，両者の間の交流も，トルコ人ど

うしの交流もほとんどなかった，とも書かれている。ドイツ人からもトルコ人からも，地区の住民に占めるドイツ人の割合はもっと高いほうが望ましいという意見が表明されたとのことである。そして，ドイツ人のいるところにトルコ人が転居していくという行動が，静かにしかし明白に進行している，と記されている。ゲットーの状態に置かれるよりも，ドイツ人家族と共生するほうが望ましいとトルコ人は見ているというのである。そのような事例として，ブルックハウゼンに住み，テュッセン社でトラックのマイスターとして働くトルコ人家族の例が記されている。彼の妻は一見してトルコ人と分かる風ではないし，子供たちはドイツ語を完璧に話すし，むしろトルコ語の補習教育を必要とするほどだった。この子供たちはドイツ人の子供と遊ぶのが普通だし，基幹学校からギムナジウムに転校することも確実だとのことである。とはいえ，このようなトルコ人の子供は例外に属するということも書かれている。

ともかくも，この新聞記事は，ドイツでの居住期間が長くなればなるほど，外国人のドイツ人への適合の希望は強くなるし，家族とともにドイツに留まることを希望すればするほど，そうだと記されている。この街区で多くの住宅を所有するライン住宅株式会社，労働局，市の外国人局・住宅局，そして市の政治家たちは，当時，正しい方向に歩んでいると考えていたとのことである。その正しい方向とは，外国人労働者が無制限に流入することを阻止し，外国人ゲットーを作りださない，ということである。その希望が見出せると上記の新聞記事に記されている。

しかし，これは楽観的すぎる見通しだった，と言わざるをえない。事実として，ブルックハウゼンの外国人ゲットー化は進行したからである。のみならず，全く逆の見通しを示す事態も，当時，既に進行していたからである。ヘーン夫人の著書には，1972年頃のことであると推定される次のようなエピソードが記されている。

ある日のこと，夫人が家の窓から外を眺めていると斜め向かいの家に濃青色のフォルクスヴァーゲンのワゴン車が停っていた。これは，またもや

転居してきたトルコ人の引っ越し荷物を運ぶ車であると考えられた。その建物の3階に住む既知のトルコ人が大声を出してそのワゴン車の人間と話していることからも，それと知れるとのことだった。ところが，この建物に住んでいたあるドイツ人から，ヘーン夫人は，そのつい数日前に次のような話しを聞いたばかりだというのである。

「子供は一晩中咳ばかりするし，建物の手入れはもう全くされていないのよ。廊下の壁はシミだらけだし，湿気ているし，かびだらけ。窓はきちんとしまらないのでおんぼろ小屋と同じ。浴室と子供部屋なんて夢の夢よ。テュッセン社はもう何年も前からこの住宅家屋には全く手を施してないのよ。しかも家賃は70%も値上げするというんだから。だからよそへ引っ越すの。そう夫が私に断言したのよ。私たちが出ていっても，そのあとにすぐ人が入ってくるわ。ほとんどはトルコ人よ。あの人たちは賃貸契約を結ばないんですって。入り用でなくなったら，すぐに追い出すことができるということね。トルコ人は私たちよりずっと貧しいのよ。」(Höhn, 1983, S. 47-48)

このように語るドイツ人に，一度家に来てみてくださいと誘われたヘーン夫人は，それに応じてそこを訪ねてみたことがある。建物の中にはいってみると，生ゴミの臭い，もうもうとたちこめるタバコの煙，にんにくの臭いがまず鼻をさした。壁紙はずたずたに引き裂かれているし，階段は朽ちて歩みを進めるごとにきしむ音がするという建物だった。トイレは共用で，階段の踊り場にある。子供の泣き声，ひどく大きな音のトルコの音楽が半開きになっているある住宅の中から聞こえてくるという状態だった。そこには半ダースほどの子供の靴が並んでいた。(Höhn, 1983, S. 49-50)

こうした状態をヘーン夫人はたんたんと描写するだけであり，格別の評価を下しているわけではない。しかし，同じ建物に住むドイツ人であれば，恐らくたまらない気持になるのではないかと，読者をして想像させる筆致である。もっとも，たまたまここのトルコ人の夫人と廊下でばったり出会ったヘーン夫人は，訪ねようとしていたドイツ人夫人の住宅は何階にあるの

かとドイツ語で聞いたところ，そのトルコ人夫人はきちんと，しかも親切に答えてくれた，と記してもいる。(Höhn, 1983, S. 50)

1972年か1973年の頃のことであると推定される，次のようなエピソードも，当時，ドイツ人とトルコ人との間でコンフリクトが発生していることを示唆する。この街区には婦人互助会とでもいうべき集まりが，福音派教会のなかにあったが，そこで話題になることはきまってトルコ人のことだったというのである。ある人は，「今日，トルコ人が住宅のなかで羊を屠殺したらしい」と語り，どういう祭りのためにそんなことをやっているのか知らないが，この問題について同じ建物に住むトルコ人と話をしなければならない，と息巻いたとのことである。また，教会の建物をトルコ人学級のために使用させてもらえないかという学校からの要請を，教会管理委員会が承諾したことを知ったある婦人は，それでは教会から脱退する人が出てくるし，外国人をこの街区から追い出してしまうのが一番だと考える人たちがいるし，こういう人たちの気持を少しは理解できると語ったのである。(Höhn, 1983, S. 127-128)

1975年秋には，この街区に住むドイツ人のなかに，トルコ人に対してあからさまな罵りを発する者がみられるようになった。ヘーン夫人は，家屋の壁に「外国人失せろ」とか「トルコ人は出てゆけ」という落書きを見たことを記している。(Höhn, 1983, S. 144)

『ライニシェ・ポスト』紙は1975年9月から10月にかけて，ブルックハウゼン街区の問題を論ずるシリーズ記事を掲載した。その第5回は「いくつかの街路全体が外国人の手に握られた」という標題がつけられ，外国人住民とドイツ人住民との間の関係が抜き差しならないものになりつつあることを報じている。つまり，その1年前には外国人比率が28.5%だったが，1975年4月には32.4%に上昇したし，トルコ人比率は23.8%にものぼっており，特にヴェルナー・シュトラーセでは308人の住民のうち199人が外国人，そのうちトルコ人が190人で過半数を超え，ライナー・シュトラーセでは637人の住民のうち半数が外国人だというのである。街のド

イツ人は，ブルックハウゼンのひどい状態を外国人のおかげであると考えるようになってきているという。夜一人で外をあるくことができない，と語るドイツ人婦人がいるかと思えば，商売が停滞しているのは，豚肉を買わないトルコ人が増えたからだと考える肉屋の主人がいる。この新聞にはエディト・シュトラーセにトルコ人の肉屋と魚屋が開業していることも記されている。他方で，ブルックハウゼンはテキサスと同じだと語るトルコ人住民もいる。シュール・シュトラーセに住むそのトルコ人は，トルコ人住宅の窓を叩き壊したり，トルコ人のことを罵るドイツ人がいる，と述べている。こう語ったトルコ人は，同じ建物のなかに一緒に住みたいとは思わない人々がトルコ人のなかにも少なからずいることも認めている。要するに，住宅建物を清潔な状態に保たない同胞がいるというのである。(*RP* vom 11.10.1975)

明らかに，1974年から1975年にかけて，この街区に住むドイツ人の中にトルコ人に対する偏見が広がっていたし，それに基づいて差別的言辞を吐くドイツ人も現れるようになっていた。場合によれば，それが暴力の形を取りつつあったことも読み取れる。

上記の新聞の別の記事によれば，この街区の基礎学校に通う子供553人のうち237人が外国人だった。ドイツ人と一緒に学ぶ普通学級に属する外国人は63人でしかなく，その他の174人のトルコ人と17人のそれ以外の外国人の子供は，外国人だけの学級で普通学級に移るための準備をしていた[2)]。トルコ人の子供に対しては6人のトルコ人教師が教えていたが，親たちは子供の教育に関心を持っていなかった。関心を持たない理由は，いずれトルコに帰ると考えていたからであり，またエディト・シュトラーセとバイロイター・シュトラーセの角にあるモスク付属コーラン学校に通っていたからである。基礎学校の校長は「外国人を真に統合することは目下のところ夢想でしかない」と語ったと，報じられている。当時，街区の3〜6歳の子供をみると，外国人が204人，ドイツ人が164人だったので，この時点の基礎学校でまだ外国人は過半数に達していなかったが，近いう

ちに多数を占めるようになることが確実と見られていた。(*RP* vom 18.10. 1975)

街区取り壊し計画に抗する市民運動 BIB が 1975 年から 1976 年にかけて起こり，そのための組織が 1980 年代に入っても活動を続けたことは，別稿に記した（山本，1998)。BIB が発行する新聞にも，1977 年初めあるいは 1976 年末に，ブルックハウゼンにおけるドイツ人とトルコ人との間の関係が必ずしも順調なものではなかったことを示唆する記事が掲載されている。当時ブルックハウゼンの人口が約 6 千人，そのうち約 2 千人がトルコ人であることをまず新聞は述べ，ついで住宅家屋の中でさまざまなコンフリクトがドイツ人とトルコ人との間で起きていることを指摘している。異なる生活慣習，大きな音，臭いも含めた台所からの発散物などが，そうしたコンフリクトの具体例であった。トルコ人を招いたのはブルックハウゼンの住民ではなく，テュッセン社が労働力として招いたのであって，その結果として単なる労働力ではなくさまざまな問題もかかえる人間がやってきたこと，しかし同時にトルコ人がブルックハウゼンの生活にとって豊かなものをもって来たということを承認せず，トルコ人を追い出すことができればよいと考える者も街区の中にいることを新聞は率直に認めている。しかし，冷静に考えてみれば，トルコ人とドイツ人との共生が必要だということが明かになる，と新聞は指摘している。2 千人のトルコ人がブルックハウゼンからいなくなれば，そして空き家になった住宅に誰も引っ越してこなくなれば，残りの 4 千人のドイツ人がこの街区に住み続けるチャンスがなくなる，というのである。好むと好まざるとにかかわらず，この街区のドイツ人はトルコ人とともに生活しなければならないし，市民運動の考えからすればうまくやっていける，と記されている。共生が可能なことを示す証左として指摘されたのは，1976 年 9 月の街区祭りに参加した住民のうち少なくとも半数はトルコ人だったこと，BIB が主催した 12 月 3 日のノミの市にはトルコ人が運営するトルコ名物を供する屋台も出たし，トルコの民族舞踊も披露されたということである。(*BIB*, Nr.5, 1977, S. 8.)

なお，1977年6月18日には第2回の街区祭りが開催されたが，ここには昼の部と夜の部の両方をあわせて約1500人が参加し，1976年の祭りよりも多くのトルコ人が参加したし，そのことをBIBは喜んでいると，その市民運動新聞第10号に報道された。(*BIB*, Nr. 10, 1977, S. 1-4.)

BIBの新聞第5号には，注目すべきことに，1部の記事がトルコ語で書かれている。これはそれまでに発行されたBIBの新聞になかったことである。この記事は，トルコ人青少年にとって，ブルックハウゼンで暮らしていくうえでどんな機会があるかという情報を記したものである。例えば，1976年7月からブルックハウゼンの青少年失業者に対する助言を行うためのソーシャルワーカーが福音派の団体ディアコーニシェス・ヴェルクによって配置され，このソーシャルワーカーが外国人青少年の失業問題に関わる相談にも応じていることを知らせたり，毎週土曜日の18時30分から21時まで，15歳から17歳の外国人少年のためにディスコが福音派の教会で開かれる，という情報などである。(*BIB*, Nr. 5, 1977, S. 6-7.)

ディスコについては，1977年2月頃に発行されたと考えられるBIBの新聞第6号にもう少し詳しく記されている。これによると，暴力事件がディスコ開催のたびに起きるようになったので1975年にいったんこれを閉鎖したが，1976年初め頃から，10歳から14歳の子供のために青少年の家で毎週土曜日と日曜日の午後にディスコが開かれるようになった。これはミニテクと呼ばれ，ドイツ人と外国人の子供の両方が参加してきた。しかもこのミニテクは12歳の子供5人ともう少し年長の子供3人の合計8人が自主的に運営しているし，喫煙・飲酒などの問題も起こらなかった。そうこうするうちに，より年長の青少年からもミニテクと類似のディスコが要望されるようになった。そこで1976年11月からミニテクの終わった後に15歳から18歳の少年たちを対象としたディスコが開かれるようになった。これにはドイツ人も外国人も協力したし，禁酒にもかかわらず参加者数もしだいに増えてきた。1977年初め時点では何も問題が起きていないし，そのことはドイツ人青少年と外国人青少年とがお互いに協力してやれると

いうことを示すものだと，その記事は結んでいる[3]。(*BIB*, Nr. 6, 1977, S.4.)

ところで，1978年のBIBの活動家会議の議事録には，ブルックハウゼンにおけるドイツ人とトルコ人との間の関係を示唆する記録がいくつかある。そこでこれらを紹介しておきたい。1978年4月5日に予定している借家人集会のための相談との関連で，トルコ人教師とコンタクトを取る必要があるとされた。それは，中庭などに植えられている植物を引き抜かないように，トルコ人の子供にトルコ人教師から諭してもらうためであった。もっとも，実際にトルコ人の子供がそういうふるまいをしていたかどうか，それについては前後の議事録を見ても何も触れられていない。また，中庭などにゴミを散らかさないように訴えるプラカードをドイツ語とトルコ語で作成する必要のあることが，同じ会議で確認されている。(Protokoll der BIB-Sitzung vom 28.3.78.)

1978年4月18日の議事録によると，ヴェルナー・シュトラーセにある住宅を訪問した2人のBIB活動家，ピパ氏（K. H. Pipa）とランデラート氏（H. O. Randerath）の報告によると，ドイツ人はこの通りからすべて転出しまっていて，トルコ人しか住まなくなっていたとのことである。(Protokoll der BIB-Sitzung vom 18.4.78.)

他方同年9月の会議では，同じ住宅家屋に住むトルコ人と理解し合うことが困難であると訴えているドイツ人が少なくないということ，この問題がますます大きくなっていることが話題になった（Protokoll der BIB-Sitzung vom 12.9.78.)。同じ話題は，翌週の会議でも取り上げられた。この街に住む多くのドイツ人の言によると，トルコ人との日常生活における問題はますます抜き差しならないものになりつつあるとのことであり，それは特にこの街へのトルコ人の転入が止まらないからだという。これに関連してヘーン牧師は，この街の住民を引き裂き，トルコ人ゲットーと化するよう計画されているのではないか，という懸念を表明した。外国人ゲットーにすれば，外国人は容易に国外に退去させうるし，そうすれば街の取り壊しを容易に行えるからではないか，というのである。ヴェルナー・シュ

トラーセの住民がトルコ人だけになるのは，エムシャー・シュネルヴェークというアウトバーンを建設する際に，容易に建物を取り壊せるようにするためだろうというのがヘーン牧師の解釈だった。しかし，BIB はそうした問題があるということを議論しただけでなく，ドイツ人とトルコ人との間の相互理解を図るための方策を探った。同じ日の会議で，相互理解の進展のためにトルコ人との接点としての役割を果たす人を探す必要があるとされた。(Protokoll der BIB-Sitzung vom 19.9.78.)

次の週の会議では第1番にトルコ人とドイツ人との間の共存をどう作りだしていったらよいか，現状をどのようにして改善できるかがまず話題になった。トルコ婦人や教師を引き込むこと，トルコ人青少年や子供のためのソーシャルワークを行うこと，言葉を学ぶ必要があること，共同の祭りを行うこと，ブルックハウゼンへのこれ以上の外国人の転入を抑えること，共通の会合の機会を作ること，トルコ人の望みを把握すること，この街の諸問題をトルコ人とともに解決すること，宗教を考慮すること，住宅家屋のなかでの騒音防止を図ること，ドイツの法律について情報を提供すること等々が提案された。しかし，この会議の議事録だけからでは，決定的な解決策が見出された様子は認められない。(Protokoll der BIB-Sitzung vom 26.9.78.)

さらに次の週でもトルコ人との関係が話題になった。接点としての役割を果たすことが期待されているらしいトルコ人とコンタクトを取ろうとしているが，依然としてコンタクトが取れていないと記録されている。(Protokoll der BIB-Sitzung vom 3.10.78.)

このように BIB の活動家会議で外国人問題が議論された時期と符節をあわせるように，市議会の CDU 会派が，ブルックハウゼンにこれ以上外国人が流入して来ることをストップさせるべきだと主張していることが報道された（*WAZ* vom 2.3.1979)。これは，BIB が各政党にあてた公開質問状に CDU が答えた内容との関連で報道されたものであり，BIB と CDU はこの点については意見が一致している，とこの記事に付属して掲載され

た中庭で遊ぶトルコ人の子供たちの様子に関する写真キャプションに書かれている。

1979年秋にもトルコ人との関係が問題になった。そしてこの問題を，別の機会に時間を取って議論する必要があるとされた（Protokoll der BIB-Sitzung vom 2.10.79.)。しかし，その後，この問題が集中的に議論された様子は議事録の限りではみられない。外国人問題が再び集中的に話題になったのは，1年以上後の1980年11月25日での会議だった。ここでは，マイデリヒ・ベルクからブルックハウゼンに転入してきたトルコ人やデュースブルク市の中心部（ニーダーシュトラーセ）にあるトルコ文化センターの代表と会うことが議論された。長い議論の末，これらの人たちと会合する必要があるとされた。またBIBのなかにトルコ人との共存の問題を集中的に考える作業グループの設立が提案された。(Protokoll der BIB-Sitzung vom 25.11.80.)

ヘーン牧師とフォークトレンダー牧師補の共同執筆になる福音派教会の活動記録がある。これには，BIBへの取り組みとそれに関する反省も記されているが，その中に，外国人問題はBIBによっては解決されえない方向で進んだと記され，それはつまり，BIBの活動のなかに外国人住民を広範囲に引き入れることができなかったということを意味する，という文章がある（Höhn & Voigtländer, 1979)。BIBの活動に積極的に関わり，そこでリーダー的役割を果たし，現在もブルックハウゼンに住んでいるドイツ人に，筆者は直接尋ねる機会があったが，彼はBIBの活動にトルコ人が関わったことはないと言下に答えた。しかし，重ねてBIBの新聞にはトルコ語で書かれた記事もあるから誰かトルコ人が積極的にBIBに関わったことがあるはずだと思うと尋ねると，そう言えば，トルコ人教師がある時期，BIBの活動に協力してくれた，とその人は語った。いずれにせよ，ますます多くなりつつある外国人を，街区の維持と再活性化のための市民運動に広範に引き込むことができなかったということは事実であろう。

ところで，デュースブルク大学社会教育ゼミナールの学生で，ブルック

ハウゼンの福音派教会の仕事に実習生として関わった人たちは，率直に1970年代末当時のブルックハウゼンにおけるドイツ人青少年とトルコ人青少年のあいだのよそよそしい関係を記録している。1979年4月23日付けの第4ゼメスターの学生のリポートには，街区の青少年たちの集まりについて，次のように記している。

「青少年作業において，ミニテクとマキシテクは非常に重要である。これはブルックハウゼンの青少年にとってダンスをする唯一の機会である。これに青少年はよくやって来る。その数は約25〜35人であり，次のような構成になっている。男子はほとんど外国人で，約20〜27人。女子はほとんどドイツ人で5〜8人。ミニテクは16時〜18時に，マキシテクは18時〜22時に行われる。ドイツ人実習生が外国人青少年とここでコンタクトをとるのは，限定されているように見受けられる。だから問題群を聞き知り，それに取り組む可能性も限定されている。程度の違いはあるが言葉の壁があるし，信頼関係もそれほど発展しないし，共通の対象領域が欠けている。それに加えて，ミニテクとマキシテクに来る青少年はダンスをし，音楽を聞くために来るのであって，そこでは音楽のボリュームをいっぱいにあげるのが極めて重要になっている。」(Arbeitsergebnisse “Praxisprojekt”, S. 2) ちなみにミニテクは11〜15歳の子供が，マキシテクは15歳以上の青少年が訪問するものとされていた。

別の学生は次のようなリポートを書いている。この街区の若者の3分の1は失業している (Arbeitsergebnisse “Praxisprojekt”, S. 10-11)。「個々の領域で示された困難は，本来，青少年作業の状況の特徴を全くよく示している。なんらかのプロジェクトに青少年を積極的な継続的な共同作業へと導き動機づけようとし，自分たち自身の関心のためにそれに尽力することが重要なときに，常に同じ問題が生ずる。私は，それが一つには私たちの経験の不足に帰せられると思う。しかし，他方で，彼らが実際になにを欲しているのかを知らないということにも問題がある。既に示唆したように，私たちは私たちの仕事においてしばしば私たちの能力と欲求から出発

したが，しかしそれは，全く異なる社会化の条件の故に，ここの青少年の能力や欲求と一致するとは限らなかったのである。さらにとくに，ここでは次の事実も考慮にいれられなければならない。ここにやって来る青少年はますますトルコ人だけからなるようになってきている。つまり，階層に特有の違いがあるだけでなく，文化の違い，宗教の違いも付け加わるのである。この現象は，学生に対してさまざまな関心に関する問題を投げかけるだけでなく，極めて重要でもある。というのは，大きくはその理由からドイツ人青少年が，青少年の家にますます来なくなってきているからである。トルコ人青少年にとっては，これは新たなゲットー化を意味する。それを彼らは居住という点で，どのみち経験していることだが。」(Arbeitsergebnisse "Praxisprojekt", S. 15-16)

別の学生たちのリポートには，福音派教会の地下室に作られたディスコについて，次のように記されている。「私たちが実習に入ったときには，ディスコはトルコ人の協力者によって運営されていた。彼の運営のもとで，時々暴力行為が起きたし，青少年によって作られ，受け入れられた規則に対する違反行為がなされた。例えばアルコールの禁止が常に守られたわけではない。暴力行為も起きた。」ちなみにミニテクに来る少年はほとんどおらず，マキシテクに来る青少年は，青少年の家の別の催し物にやって来るトルコ人とほとんど同じだという。女性でディスコに来るのは，全体の約20%でしかない。ディスコで上述のような問題が起きたので，ドイツ人学生実習生がいるときにのみディスコが運営されるという方式が取られるようになったが，これが新たな問題を引き起こした。トルコ人青少年が自分たちの運営能力を認められていないと感じ取り，自分たちで運営したいということになった。そこでそのために信頼できそうな5人を選んで運営をまかせたが，仕事の確実性，時間厳守，責任感，誠実性，青少年の家の協力者の会議への参加，等々の点でちゃんとやれたのは2人にすぎなかったというのである。そこで，土曜日はディスコを閉めることにしたが，これがまたトルコ人青少年の不満を呼んだのである。(Arbeitsergebnisse

"Praxisprojekt", S. 17-20)

1979年夏学期から1979/80年冬学期にかけての1年間，やはり実習生としてここで働いたある女子学生は，つぎのように書いている。「ドイツ人とトルコ人の青少年が統合されて一緒に生活するということは，言葉の障壁と社会文化的な違いの故に，子供の学校に見られるだけである。…(中略)…ドイツ人青少年は，各々に関係する人やソーシャルワーカー，牧師への「忠義」から青少年の家の構造を支え，責任ある仕事を引き受けていたが，ますます青少年の家から遠ざかるようになった。ドイツ人が青少年の家から遠ざかれば遠ざかるほど，トルコ人がますます多くここにやって来るようになる」，と言えるというのである。このレポートを書いた女子学生は，「青少年の家にやって来るのは，大部分がトルコ人の男の子で，わずかな割合しか占めない12歳から15歳のドイツ人少女はここにやって来ることを大目にみられ，セックスの対象とみなされている」とまで書いている。(Arbeitsergebnisse "Praxisprojekt", Ulla Sabottka: Praktikumsbericht, S. 1-2)

3.　1980年代

1980年2月末から，福音派教会の施設を使って，トルコ人のためのドイツ語教室とドイツ人のためのトルコ語教室が開設されると報道された。これはドイツ人とトルコ人の相互理解の進展を図るために企画されたものである（*WAZ* vom 23.2.1980)。福音派の施設を使って教室を開くということなので，恐らくフォークトレンダー牧師補夫妻の発案になるのではないかと想像される。しかし，この教室のことはBIBの新聞にもこの前後のBIBの活動家会議でも取り上げられていない。また，その後，この教室に関する報道もない。恐らく，参加者があまりなかったため，この試みは成功しなかったのではないかと想像される。

同年3月には，SPDのブルックハウゼン地区会議が，トルコ人の統合

を進めるために，共同で催し物を開くと決定した。しかし，その催し物とは具体的に何かということは書かれていない。それはともかくとして，記事の論調からすると，ブルックハウゼンではドイツ人とトルコ人との間の関係がうまくいっていないということが読み取れる。ドイツ人とトルコ人の共存の困難性に対処するために，上のように決定したと書かれているからである。また，トルコ人はドイツの法律をあまりにも知らなさすぎるという批判がドイツ人住民から出されていることも書かれている（*NRZ* vom 15.3.1980)。これは恐らく，特定の曜日や特定の時間帯に静寂さを保つというドイツの慣習に，必ずしもトルコ人が対応していないということを意味するものと考えられる。そもそも，ドイツの法律を知らないといっても，数ある法律のすべてを知っているなどということは，ドイツ人にも不可能なことであり，住民感情で問題になるのは，ある民族において常識とされていることが，他の民族には必ずしも常識ではないことからくるコンフリクトだからである。

同年4月には，ブルックハウゼンやベークに住むトルコ人で基幹学校に通うものの一部が，ヴァルズムの基幹学校にスクールバスで通うこととされる，という報道がなされた。これはメーレンカンプ・シュトラーセにある基幹学校が30の教室数しかないのに対して，35から37の学級を次年度に見込まざるをえないためであった。ただし，スクールバスでかなりの遠方まで通うのは，トルコからやってきたばかりで，まだドイツ語がうまくない生徒に限られると報道された。(*WAZ* vom 29.4.1980)

1981年4月には，空き地になっている区画を，菜園として，ディーゼル・シュトラーセとオーファーブルッフ・シュトラーセに住むトルコ人が自主的に利用し始めた。その土地はテュッセン・バオエン・ヴォーネン社（ライン住宅株式会社の後継会社）のものらしいが，担当者が休暇で連絡が取れないため，詳しいことは分からないということだった。トルコ人の行動に対して，隣人のドイツ人は批判的なまなざしをもってみており，トルコ人はドイツの法律を順守しないとみている，と報道された。(*NRZ*

vom 1.4.1981)

他方で，ドイツ人の老婦人とトルコ人とがひとつの住宅家屋のなかで問題なく共存していることを伝える新聞記事もある。ゴシップ記事で悪名高いビルト紙が，ブルックハウゼンのバイロイター・シュトラーセ 20 番地に住むドイツ人老婦人に対するインタビュー記事を掲載したのである。これによると，1930 年からここに住んでいるそのドイツ人は，12 年前に夫に先立たれたが，その半年後，即ち，1969 年あるいは 1970 年に，この住宅家屋にトルコ人が入居してきたとのことである。その後，ここに住んでいたドイツ人はどんどん転出し，かわってトルコ人が集中するようになった。かつては 23 人のドイツ人が住んでいたが，1981 年時点で 40 人のトルコ人が住むようになった。この建物の住宅内部にはトイレがなく，共同トイレが階段の踊り場についている，という家屋である。住宅も狭く，浴室のない 2 部屋住宅が主であり，家賃は当時 125.90 マルクだった。4 階建てで 10 の住宅があるというから，屋根裏部屋を含めて 5 階建ての構造だと考えられる。そのドイツ人婦人が病気で寝ているときに，同じ家屋に住むトルコ人が世話をしてくれたということであり，そのようなことは以前住んでいたドイツ人にはなかったことだというのである。このドイツ人老婦人は当時 79 歳だったが，同じ家屋に住むトルコ人の 2 歳と 1 歳の子供を毎日面倒見ていると書かれている。(*Bild* vom 16.6.1981)

1982 年 4 月には BIB の内部で若者と年配者との間で，トルコ人が置かれている状況をどう評価するかに関して意見の違いが明かになった。議事録にはその例として，住宅，仕事等々についてトルコ人には常に最悪のものが提供され，それに対してトルコ人は自らを守る術がないのだから，ドイツ人はトルコ人を援助すべきだというのが若者の考えだった。他方，年配者は全く逆の考えを持っていた。ブルックハウゼンではトルコ人が多数者となっており，彼らの自己防衛は十分なされている。また職業教育を受けていないものが専門労働者の仕事ができないのは自明のことである。ドイツでも，例えば，家族の社会的位置が修得されなければならないし，こ

れは1年や2年で達成されうるものではないということを，トルコ人は理解しなければならない。以上が年配者の見方である（Protokoll der BIB-Sitzung vom 27.4.82.)。

議事録ではそれ以上具体的なことが書いていないので，年配者が家族の位置ということで何を言おうとしたのか不明であるが，自分たちと同じ街に住むトルコ人をめぐる評価が違えば，トルコ人とドイツ人との共存をどう作り上げていくか，という問題もおのずと異なって考えられざるをえない。しかし，この会議ではそれ以上突っ込んだ議論はなされなかったようである。

1982年に，デュースブルクの外国人とドイツ人との関係を，当時エッセン大学の教授だった社会学者エッサーとその研究協力者が調査した(Esser, 1983)。これには，ブルックハウゼンの住民も調査の対象となっていた。そこで，以下，この調査報告書から読み取ることのできる，両者の関係を述べてみたい。

調査に際して，デュースブルク市の中から，外国人比率が極めて高い地区としてブルックハウゼン，高い地区としてマルクスロー，平均的な地区としてウンターマイデリヒ，低い地区としてデューセルン・ノイドルフの4つが抽出され，さらに各地区のなかで同様に外国人比率が極めて高いブロック，高いブロック，平均的なブロック，低いブロックの4つが抽出された。ランダムサンプリングの方法で被調査者が各地区から約40人抽出され，1982年5月半ばから6月半ばに，トルコ語のアンケート用紙による，トルコ人調査協力者の手助けをえた調査が行われた。

上記のサンプル数は，各地区の特徴を把握するには足りているが，各ブロックの特徴を把握するにはやや少なすぎると考えられる。調査分析の記述では，外国人比率の極めて高いブロックと高いブロックとが一緒に扱われ，また平均的なそれと低いそれとが一緒に扱われている。さらに，外国人比率が高いブロックと平均的なブロックとの間で，外国人比率の差はそれほど大きなものではない。そこで，以下では，ブルックハウゼンの特徴

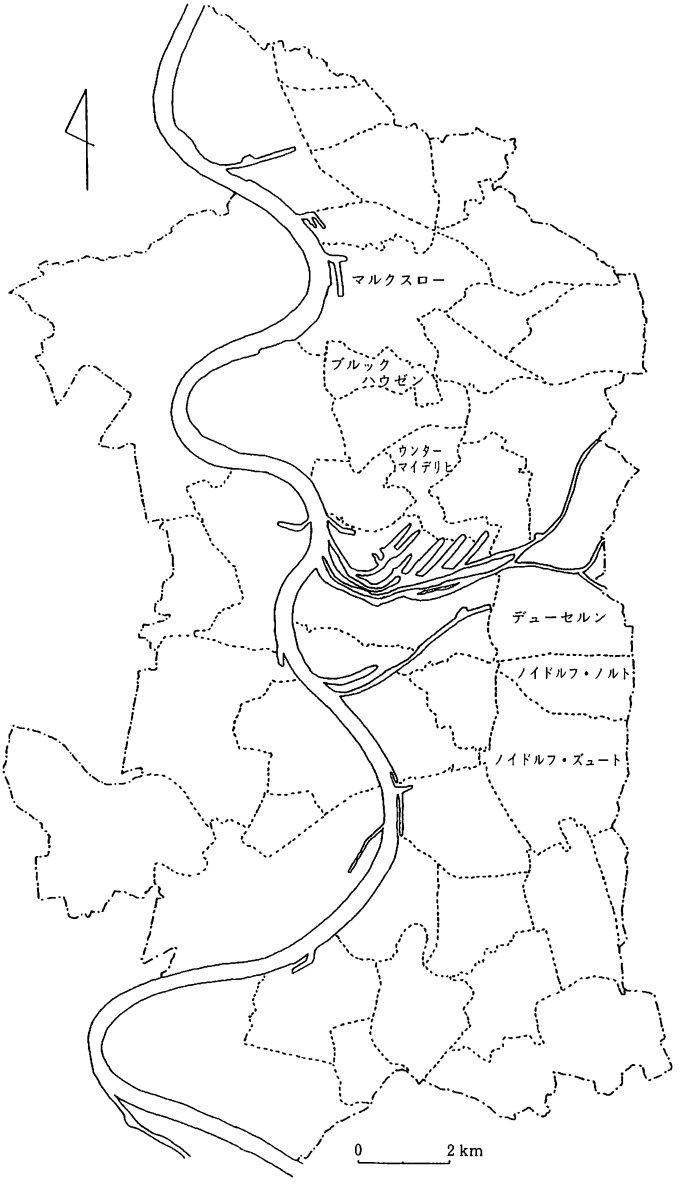

図1　Esser らの調査対象地区の位置

表1　Esser らの調査対象地区の人口構成

	調査街区のブロック	総人口	外国人人口	トルコ人人口	外国人比率	外国人に占めるトルコ人比率
ブルックハウゼン	1	940	688	623	73.2%	90.6%
	2	649	227	158	35.0%	69.6%
	3	716	174	136	24.3%	78.2%
	4	420	29	19	6.9%	65.5%
	小　計	2,725	1,118	936	41.0%	83.7%
マスクスロー	1	1,865	1,505	1,272	80.7%	84.5%
	2	982	234	182	23.8%	77.8%
	3	959	180	107	18.8%	59.4%
	4	1,454	101	41	6.9%	40.6%
	小　計	5,260	2,020	1,602	38.4%	79.3%
ウンターマイデリヒ	1	750	519	505	69.2%	97.3%
	2	435	124	94	28.5%	75.8%
	3	969	132	83	13.6%	62.9%
	4	1,756	123	76	7.0%	61.8%
	小　計	3,910	898	758	23.0%	84.4%
デューセルン・ノイドルフ	1	678	187	134	27.6%	71.7%
	2	590	107	80	18.1%	74.8%
	3	2,564	204	53	8.0%	26.0%
	4	2,803	163	28	5.8%	17.2%
	小　計	6,635	661	295	10.0%	44.6%

出典：Esser（1983, S. 54）

を述べることはあっても，各ブロック間の違いにまでは，報告書で言及してあっても，触れないことにする。

なお，調査が行われた各地区の外国人比率や，そのなかでのトルコ人比率は，表1に示されているとおりである。そこから分かるように，地区としての外国人比率に違いがあっても，ブロックで見るならば，デューセルン・ノイドルフを除く調査対象地域の間には，大きな違いがなかった。いずれの地区でも外国人比率が極めて高いブロックでは，この比率が50%を上回っていたし，その中でのトルコ人比率も80数%以上に達していた

からである（Esser, 1983, S. 54)。

まず，被調査者の特徴から見ていきたい。その出身地域が都市的な所であると回答した者はマルクスローやウンターマイデリヒでは過半数に達したが，ブルックハウゼンでは40%強でしかなかった。しかし，人口10万人以上の大都市出身者はどこでも少なく，要するに農村あるいは農村地域の小都市出身者が多数を占めた。また，被調査者の父親が学校教育を受けなかったと回答する者はどの地区でも過半数に達した。被調査者本人も中等以上の教育を受けなかった者が70%以上いたし，ブルックハウゼンではこれが80%にもなった。当然のことながら，トルコで未熟練ないし半熟練労働者だった者がどの地区でも80%を超えた。なお，デューセルン・ノイドルフのトルコ人の教育水準は他に比べてやや高かった。中等以上の教育を受けなかったものは60%台だったからである。(Esser, 1983, S. 74)

西ドイツへの移住目的として重要なのは，トルコでは稼ぎが少ないということだった。これに，トルコでの自営業開始準備のため，家族の養育のため，という理由が続いている。いずれにしても経済的な理由である。これに対して，既に家族が西ドイツにいるから来たという者は，せいぜい20%台でしかない。地区による差は大きなものではない。(Esser, 1983, S. 77)

ドイツ語の会話能力は低いと自認する者が圧倒的に多かった。とくにブルックハウゼンではそれが80%以上にも達した。これに対してデューセルンでは，50%がその能力を十分持っていると自認したし，マルクスローとウンターマイデリヒでもそれが25%を超えた。ドイツ語の読み書き能力を十分持っていると自認するものはさらに少なかった。デューセルンですら20%台でしかなかったし，ブルックハウゼンにいたっては5%弱でしかなかった。マルクスローとウンターマイデリヒでは11%強がドイツ語の読み書き能力を十分持っていると自認していたので，ブルックハウゼンに住むトルコ人のドイツ語能力が特に低かった，と言わざるをえない。(S. 83-86)

ドイツの役所で意思疎通の問題を経験した者は，ブルックハウゼンで50%にも達したのに対して，他の地区では20〜30%でしかなかった。そもそもどの役所に行ったらよいのかとか，役所の書類への記入に関して困難を感じた者は，ブルックハウゼンにおいて特に高かった。(S. 90)

ドイツでの職業上の違いは，デューセルン・ノイドルフを除いて大きくない。いずれにしても大多数が未熟練ないし半熟練の仕事についていた(Esser, 1983, S. 97)。とはいっても，仕事に不満を持つ者も少なかった。特にブルックハウゼンでは仕事に満足しているという者が他の地区よりも高く，80%近くに達した（Esser, 1983, S. 99)。世帯主の月収が手取りで1800マルクを超える者は，どの地区でも半数以上を占めた。ただしデューセルン・ノイドルフでこの比率が74%と高いのに対して，ブルックハウゼンでは56%とやや低かった。また，世帯収入になると2100マルクを超える者がどの地区でも過半数に達していた（S. 103-104)。ただし，その事実は世帯構成員のうち複数が働きに出ているということを直ちに意味するわけではない。西ドイツでは賃金とは別に育児手当てが労働局から支出されるし，その金額が370マルクを超える者，即ち子供の数が4人以上になる者が，ブルックハウゼン，特にアルト・ブルックハウゼンで40%以上にも達していた（Esser, 1983, S. 105)。1ヶ月の貯金額は，ブルックハウゼンでやや少なめだった。500マルク以上の貯金を持つ者が他の地区では20〜40%にもなるのに，そこでは17%でしかなかった。そもそも貯金の余裕がないとする者も，ブルックハウゼンでは他の地区よりもやや多かった（Esser, 1983, S. 107)。

会社所有の住宅に住む者が，ブルックハウゼンではその調査ブロックの性格から，77%と圧倒的に多かった。民間住宅市場で住宅を入手したという者が他の地区では30%以上だったのに対して，ブルックハウゼンでは10%でしかなかった（Esser, 1983, S. 111)。また勤め先から住宅を斡旋されたとする者が，ブルックハウゼンでは多かった（Esser, 1983, S. 118)。ただし，ブルックハウゼンでも，仮にライナーシュトラーセやシュールシュ

トラーセ，あるいはカイザー・ヴィルヘルム・シュトラーセが調査の範囲に入れられれば，結果はやや違っただろう。これらの通りには，民間個人の所有になる住宅が多いからである。上のようなブルックハウゼンの特徴は，調査対象ブロックの選定の故に生じたもの，と解釈することもできるのである。

西ドイツと比べて，故国での住宅がはるかに低水準だから現在の住宅に満足している，と回答する者はほとんどなかった。しかし，理由はともかくとして現在の住宅に満足する者は，ウンターマイデリヒを除いて60%を超えていた。他方，引っ越したいとする者もどの地区でも40%を超えた。その理由として，住宅設備の悪さと住宅の狭さとを挙げる者が多かった。また，引っ越したいとする者のうち，外国人が多すぎるからと回答する者が，ブルックハウゼンでは半数に達した。他の地区ではそれがもっと低かったにもかかわらずである。逆に近くにドイツ人が多すぎるからと回答した者が，他の地区では無視できる比率であるにもかかわらず，ブルックハウゼンでは20%を超えた（Esser, 1983, S. 119-122)。以上の回答結果から，ブルックハウゼンに住む外国人が，両極端の認識，考えを持っている者から構成されていた，といえよう。

家賃はどこでも安かった。300マルク以下が過半数を占めていたからである。しかし，200マルクを下回るというほどに安い家賃の住宅に住む者は，むしろ，マルクスローやウンターマイデリヒの方が多かった。支払ってもよいと考える家賃の限度額は，決して高くなかった。しかし，300マルク以下でなければ困るという者も，40%前後以下でしかなかった。ただし，500マルクを超える家賃を支払ってもよいとする者も非常に少なかった（Esser, 1983, S. 124-126)。住宅水準は決して特によいというわけではないが，そう悪くもなかった。住宅内部にトイレがあるとする者がブルックハウゼンですら92%を超えていたし，浴室が完備されているとする者も60%を超えていたからである（Esser, 1983, S. 127)。住宅水準は，むしろマルクスローのトルコ人の方が悪かった。これらの回答は，ブルック

ハウゼンのトルコ人が，ブルックハウゼンの中では相対的によい住宅に住んでいたということを意味する。ただし，これも調査対象ブロックの性格に帰せられることであって，ブルックハウゼン一般においてトルコ人の住宅が良好だったというわけでは必ずしもない。

ドイツ人とのコンタクトが仕事場を除く日常生活の中にあるとする者は，ブルックハウゼンでは40%近かった。これはデューセルン・ノイドルフの58%よりも低いが，マルクスローやウンターマイデリヒの20%台よりもかなり高い数値である。しかし，余暇のためのスポーツ団体や他の余暇活動団体に所属する者はほとんどいなかった。他方，労働組合への所属率は約60%であった（Esser, 1983, S. 131-135)。また，もし西ドイツで選挙権を与えられれば，投票するとする者は80%以上に昇った。そしてSPD支持者が圧倒的に多かった（Esser, 1983, S. 137-139)。

西ドイツでの生活状態に概ね満足するという者はかなりの比率に昇った。来独当初ですら50%近かったし，1970年代には70%前後が満足していたからである。しかし，調査が行われた1982年現在の状況は1970年代よりも悪化していた。現状に満足するという者は，ブルックハウゼンでは45%でしかなかった（Esser, 1983, S. 146)。

ドイツ人に差別されたと感ずる者は多い。ドイツ人はトルコ人に対して不親切だとする者が60%を超えた。トルコ人はより劣悪な住宅しか得られないと考える者はもっと多かった。また，トルコ人はドイツ人よりも簡単に解雇されると考える者も70%を超えた。トルコ人はきつくて汚い，退屈な仕事を割り当てられると考える者はさらに多かった。トルコ人の賃金は悪いと考える者も50%を超えた（ただし，デューセルン・ノイドルフではこれが24%とかなり低かった)。また，児童手当てなどのことで，役所と交渉するのが困難だと感ずる者が，ブルックハウゼンとマルクスローで多かった。そして役所はトルコ人を不当に扱い，トルコ人の心を傷つけると感じている者も，やはりブルックハウゼンとマルクスローで多かった（Esser, 1983, S. 150)

トルコ人であることを強く意識する者はブルックハウゼンにおいて特に多い。その比率は80%にも昇った。ウンターマイデリヒやデューセルン・ノイドルフの50%台と比べて，かなり大きな差がある。西ドイツでドイツ人とともに生活していきたいと考える者もそう多くない。それがデューセルン・ノイドルフでは過半数に達したが，他の地区ではいずれも30%程度でしかなかった（Esser, 1983, S. 154-157)。トルコに早く帰りたいとする者は過半数を超えた。とくにブルックハウゼンでは61%と高かった。他方，デューセルン・ノイドルフではそれが約43%だった（Esser, 1983, S. 159)。

宗教はスンニ派が圧倒的に多い。しかし，アレヴィテンもブルックハウゼンで12%，デューセルン・ノイドルフでは26%に達した。モスクに通ってイスラムの祈りをよくするという者はブルックハウゼンでは60%に達した。他の地区では30〜40%だから，ブルックハウゼンのトルコ人はイスラム意識の強い者が多かったと言える。コーラン学校に子供を通わせている者は意外に少なかった。ブルックハウゼンですら32%でしかなかった。しかし，この数値は他の地区よりも明らかに高かった。マルクスローでは20%，デューセルン・ノイドルフではわずか5%でしかなかった。モスクを，居住街区にほしいとする者は多かった。デューセルン・ノイドルフでは半数にも達しなかったが，他の地区では過半数から60%に達した。(Esser, 1983, S. 162-172)

ルール地域，デュースブルク，街区，通りという，スケールを異にする各地域への帰属意識はそこそこある。ブルックフハウゼンの住民は，その順番で46%，42%，27%，54%となっている。ここでは通りという最小単位の地域への帰属意識が比較的高いのに対して，ブルックハウゼンに対する帰属意識の低さが目立つ。これに対して，デューセルン・ノイドルフのトルコ人は，上の各スケールの地域に対して，53%，58%，79%，72%という比率を示した。全体的にブルックハウゼンの住民よりも地域帰属意識が高いが，特に街区への帰属意識が高いという点に注目すべきである。

また，極めて興味深いことに，信仰心にあついトルコ人ほど，その住んでいる街区にかかわりなく地域帰属意識，特に通りという最小単位の地域への帰属意識が高かった（Esser, 1983, S. 172-178)。

さて，この調査は同じ地区に住むドイツ人も同様の方法で被調査者を抽出し，トルコ人との関係を分析している。サンプル数は各地区について約50人ずつである。ドイツ人の教育水準は明かにブルックハウゼンにおいて低かった。基幹学校卒業資格を得ていない者が22%にも達したし，基幹学校卒という者をあわせると88%になった。なお，デューセルンでは実科学校卒が比較的多くなり，基幹学校卒は他の3地区に比べてはるかに少なかった。(Esser, 1983, S. 27)。未熟練，半熟練労働者の比率をみると，どの地区においてもドイツ人はトルコ人よりはるかに低かった。ブルックハウゼンですら50%弱だった。しかしドイツ人に関する比率は，他の地区では，ブルックハウゼンよりもっと低かった。

世帯主の手取り月収は，ドイツ人の方がむしろ低かった。ブルックハウゼンでは1800マルク以上の月収を得る者が，トルコ人では56%だったのに対して，ドイツ人では38%でしかなかった。このような傾向は他の地区についても言える（Esser, 1983, S. 35)。住宅の所有者という点では，どの地区でもドイツ人とトルコ人との間に大きな差がなかったが，家賃水準は全体としてドイツ人の方がトルコ人よりも高めだった（Esser, 1983, S. 40-42)。それは住宅設備の水準を反映しており，どの地区についてもドイツ人の住宅の方がトルコ人の住宅よりもよい設備になっていた(Esser, 1983, S. 44)。住宅に対する満足度も，ブルックハウゼンといえども高く，引っ越しを希望するものは10数%でしかなかった。しかし，引っ越しを希望する者の中では，その理由を外国人が多すぎるからとするのがブルックハウゼンでは62%にも達し，他の理由をはるかに上回っていた。マルクスローやウンターマイデリヒでも引っ越しを希望する者があげる理由の中で，外国人が多すぎるというのが40%前後に達した（Esser, 1983, S. 48)。

居住地区で外国人とコンタクトのあるドイツ人はどの地区でも圧倒的に少なかった。とくにブルクハウゼンでは，コンタクトを持たない者が94%に達した。外国人比率が最も高いこの地区において，外国人とコンタクトのあるドイツ人比率が最も低いという現象なのである（Esser, 1983, S. 53)。他方，居住地区以外のところに住む外国人と，個人的なコンタクトを持つとするドイツ人は，ウンターマイデリヒやデューセルン・ノイドルフでは，他の地区よりもやや多い（Esser, 1983, S. 56)。

外国人に対する偏見はかなり大きかった。外国人の故に街区には大きな問題があると感じているドイツ人は60%を超えたし，デューセルン・ノイドルフでも50%に達した。また，外国人といえばトルコ人を連想する者が圧倒的に多かった。外国人に対するシンパシーの程度はオーストリア人に対してが最も高く，オランダ人，スペイン人，ギリシア人，イタリア人の順番で低くなり，トルコ人にいたってはベトナム人，アフリカ人，パキスタン人よりも低かった。トルコ人に対するシンパシーの程度は，どの地区も低かった（Esser, 1983, S. 65-70)。

外国人のおかげで心地悪くなっていると感ずるドイツ人はブルックハウゼンで58%にも昇った。マルクスローやウンターマイデリヒでもそれが約50%前後に達したが，デューセルン・ノイドルフでは20%を下回った。外国人のおかげでドイツ人とのコンタクトが阻害されていると感ずるドイツ人も，ブルックハウゼンで62%に達した。他の地区では50%にもみたないし，デューセルン・ノイドルフではそれが20%にも満たなかったのに対してである。外国人は外国人の間だけで暮らしたがっていると思うドイツ人は，いずれの地区でも多かった。デューセルン・ノイドルフで73%とやや低いが，ブルックハウゼンでは86%だった。外国人は高い家賃を支払う気がないとみるドイツ人も，いずれの地区でも多かった。特にブルックハウゼンでは，マルクスローと同様，80数%に達した（Esser, 1983, S. 87)。

外国人が少なくなればドイツ人の職場が確保できると考えたり，外国人

がドイツ人の職場を奪っていると考えるドイツ人は，いずれの地区でもかなり多かった。デューセルン・ノイドルフでは40%台でやや低いが，ブルックハウゼンでは60%を超えるドイツ人がそう考えていた（Esser, 1983, S. 89)。

政府がとるべき外国人政策として，外国人は西ドイツに住むのが当然だし，統合政策を取るべきだと考えるものはいずれの地区でも少数だった。デューセルン・ノイドルフですら25%，ブルックハウゼンにいたってはわずか9%でしかなかった。他方，外国人は即刻帰国するような政策を取るべきだと考えるドイツ人は，ブルックハウゼンで40%にも昇った。デューセルン・ノイドルフでは18%と統合支持者よりも少なかったが，ここでの多数派は，むしろ仕事があるかぎりにおいて外国人は西ドイツにいてしかるべきだと考える者であり，この比率が39%に達した（Esser, 1983, S. 95)。それ故，外国人を，ともに地域の生活を作り上げていく隣人としてよりも，ガストアルバイター，即ち一時滞在者と考える者がデューセルン・ノイドルフでは多かったと言えよう。

エッサーらの調査が行われた年と同じ1982年に発行された『デュースブルクの福音派教会』という雑誌（あるいはニューズレター）には，フォークトレンダー牧師補へのインタビューに基づく興味深い記事が掲載されている（*Evangelische Kirche in Duisburg*, September 1982)。この記事の標題は「ブルックハウゼンの衰退はトルコ人問題ではない」となっており，この見方自体を筆者も正当だと思うが，他方でそのような標題をつけること自体が，ブルウクハウゼンの衰退の原因をトルコ人の流入にあるとする見方が流布していたことを指し示すものである。この記事によると，ブルックハウゼンの外国人比率は60%，基礎学校に通う子供80%はトルコ人，福音派教会の幼稚園に通う子供の50%はトルコ人だった。フォークトレンダー牧師補がブルックハウゼンで仕事を始めた1979年当時はまだトルコ人の人口比率は30%であり，外国人の統合のための努力がなされていたし，またその希望も見出せるような兆候があったという。しかし，この

記事が現われた1982年には，トルコ人の統合について語られることはほとんどなくなり，トルコ人とドイツ人との間の関係はむしろ統合と逆の方向にあったとのことである。幼稚園段階ではドイツ人とトルコ人の共存はほとんど問題なくうまくいっているが，基礎学校の段階で両者の間の分離の兆候が認められるという。福音派教会には学童のための遊び場があるが，ドイツ人の子供はドイツ人どうしで，トルコ人の子供はトルコ人どうしで遊ぶのが普通になるという。そして青少年段階になると，ドイツ人とトルコ人が一緒に何かやることはまずなくなるというのである。学童の遊び場と青少年段階の施設では，トルコ人の訪問の方が圧倒的に多いという。女性のために裁縫教室があるが，ここでもドイツ人とトルコ人の共存がうまくいっていないという。その理由はドイツ人の側が優先権を主張したからだという。ブルックハウゼンでドイツ人とトルコ人が共存することはますます不可能になりつつあるという。両者の対立が暴力を伴うほどに鮮明になっているというわけではないが，共存のための努力は無に帰しているとのことである。かつてはトルコ人と協力してなされた街区のための催し物も，この時点では協力関係がなくなっているとのことである。しかし，このような状況にもかかわらず，フォークトレンダー牧師補は，ドイツ人とトルコ人の共存のための努力を続けると言明している。その手掛かりは幼稚園にあるというのが牧師補の考えである。

1984年1月には，当時施行された外国人労働者の帰国支援のための時限立法を受けて，デュースブルク市南部のヒュッテンハイムから多数のトルコ人が帰国した。しかし，ブルックハウゼンでは帰国の動きがそれほど鮮明にならなかった（*WAZ* vom 28.1.1984)。その理由は，ヒュッテンハイムのマネスマン社と違って，ブルックハウゼンのテュッセン社は，帰国のための会社独自の支援金を出さないからだという解説が報道された（*WAZ* vom 31.1.1984)。トルコ人が大挙してデュースブルクから去ることは望ましいことではなく，ブルックハウゼンから仮にヒュッテンハイムほどの規模でトルコ人が帰国したならば，空き家になった住宅を誰も新た

に借りようとせず，スラム化が発生しうるし，そのような住宅の修繕価値がないとみなされれば住宅ブロックの取り壊しがなされるだろうという見通しを，CDU のケンプゲン（Kämpgen）市議が語ったということも，同じ記事で報道された。（*WAZ* vom 31.1.1984）

1985 年 10 月には，ベストセラーになったギュンター・ヴァルラフの『最底辺』が出版された。これは派遣労働者として働くトルコ人になりすましたヴァルラフによるルポルタージュである。この本はデュースブルクの新聞にも大きく取り上げられた。特に，テュッセン社の雇用解体政策と派遣労働者の一層の利用に対するヴァルラフによる非難が取り上げられた。しかし，テュッセン社自身は，ヴァルラフによって指摘されたことが，同社には当てはまらないと反論していた。（*WAZ* vom 22.10.1985; *NRZ* vom 22.10.1985）

1986 年 3 月 6 日に，福音派の教会に付属して設立されたカフェー「リヒトブリック」のことが報道された。これは，基幹学校卒業資格を持たない若い女性が，労働市場のなかで適切な職業を身に付けることができるよう，またブルックハウゼンに住む特に貧しい人々のために安価な食事を提供するために設立されたもので，ここに 18 歳から 23 歳までの 8 人のトルコ人女性と 7 人のドイツ人女性が雇用創出施策（Arbeitsbeschaffungsmaßnahme）の資金を得て雇用された。この女性たちは料理の仕方だけでなく，栄養学や簿記のつけかた，テーブルクロスの裁縫などさまざまなことを，そのカフェーで学ぶことによって，労働市場のなかでのチャンス獲得を期待されたのである。（*WAZ* vom 6.3.1986）

1987 年には，学齢に達した児童のうち 70%以上の 64 人が，基礎学校で学ぶに足るだけの知力と体力をまだ身につけていないとして，基礎学校入学を許されず，幼稚園に回されたことが報道された。そのなかでトルコ人が多かったのかそれともドイツ人が多かったのかは，報道されていない。ただ単に，子供の知力がもともと劣っていたからそういう結果になったというわけではなく，この街区の環境の故に，そのような子供が多くなった

のであり，この状態を改善するために午後も開かれる学校が必要だと報道されたのである。(*WAZ* vom 21.5.1987)

同じころに，ドイツ人とトルコ人が気軽に会合できる場所として企画されたカフェー「隣人集会所」がシュールシュトラーセに開店した。これは，デュースブルク大学のソーシャルワーク・教育ゼミナールのエールシュレーゲル教授と，1985年から存続しているドイツ人・トルコ人婦人グループのイニシャチブで設立されたものであり（*WAZ* vom 23.5.1987; Wochen Anzeiger vom 27.5.1987)，現在でも営業を続けているカフェーである。ここでは，トルコ人女性のためにドイツ語の講習が当初行われた。またドイツ人のためのトルコ語教室も秋から開始することが企画された（*WAZ* vom 14.7.1987)。しかし，筆者の観察によれば，当初の目論みと違って，トルコ人とドイツ人との出会いの場所というよりも，この街区に住むドイツ人社会的弱者のたまり場となっているように見受けられる。

取り壊されたために現在はないが，当時まだあったディーゼル・シュトラーセ116〜124の住宅建物に住む住民が，住宅所有企業のテュッセン・バウエン・ヴォーネン社によって取り壊されるのではないかと怖れていることが，1987年7月に報道された。この当時，そこに住む住民の多くはトルコ人だったが，かれらの不安を取り上げ，また住宅の欠陥の修繕を企業に申し入れるべく活動したのは，福音派教会のグライナー（Greiner）牧師だった。テュッセン・バウエン・ヴォーネン社は，取り壊し計画を持っていないと新聞社に対して答えたが（*WAZ* vom 22.7.1987; *RP* vom 22.7.1987)，実際にはまもなく取り壊されてしまった。

1987年9月に福音派の教会が，トルコ人とドイツ人の統合を促進するために祭りを開いた。グライナー牧師は，当時のブルックハウゼンの住民の53%がトルコ人であり，しかも年々新たなトルコ人住民が転入してくる状況にあるからこそ，トルコ人住民を街区の社会的生活に統合する必要があると主張した。(*WAZ* vom 7.9.1987)

1988年9月に，あるトルコ人婦人[4]のイニシャチヴで，「民衆の家」(フォ

ルクスハウス）が，カイザー・ヴィルヘルム・シュトラーセ 34 番地の労働者福祉協会が入居している建物を利用して設立された。これは，政治的にはどの党派にも与せず，各個人が孤立している状況から抜け出すことを支援し，さまざまな民族間の交流を目的に設立されたものである。「民衆の家」の設立構想は 1986 年頃から暖められたものである。これはトルコ人に限定された団体ではないが，その名称はドイツ語とともにハルク・エヴィ（Halk Evi）というトルコ語で表現された[5]。具体的な活動は，単にメンバーが会合するだけではなく，学童の勉学の支援，フォークダンスの練習，裁縫教室やドイツ語教室の開設など，多岐にわたっていた。メンバーは主として婦人であるが，男性にも開放されており，実際少数ではあるが男性もメンバーになった。（*WAZ* vom 19.9.1988）

1989 年は，反外国人政策の主張を通じて西ベルリンを初めとしてドイツ各地で支持者を増やしてきた REP（レプブリカーナー）が話題になった年である。この年にヨーロッパ議会の選挙が行われたが，デュースブルク全体ではさほどの支持を集めなかった REP がブルックハウゼンでは 7%強の得票率を得た。しかもこの地区では，REP 以上に右翼であるといえる DVU が約 2.5%の得票率を得たので，他のどの地区よりも，ドイツ人の間に外国人敵対意識を持つドイツ人が多い，という結果になった（*WAZ* vom 19.6.1989）。また，カフェー「隣人集会所」の責任者であるハインツ・アルテナ氏は，その他の極右も含めれば，この街区のドイツ人の 14%が極右に投票したとのことである。（*RP* vom 16.8.1989）

この点について，デュースブルクの統計局が作成した資料がある。これによると，ブルックハウゼンのうち，オストアッカー街区では，投票率 47.57%，REP の得票率が 7.62%，DVU の得票率が 4.04%だった。他方，アルト・ブルックハウゼン街区のうち，ディーゼル・シュトラーセより北の部分では，投票率 33.16%，REP の得票率が 10.37%，DVU の得票率が 3.32%だった。また，ディーゼル・シュトラーセより南の部分では，投票率 32.1%，REP の得票率が 9.13%，DVU の得票率が 2.17%だった。いず

れにしても投票率が低く，極右の得票率が高いが，特にアルト・ブルックハウゼンのなかでも，住宅の密集度がより高く，民間個人の所有になる住宅家屋が多いディーゼル・シュトラーセより北の部分で[6]，それがめだった。(Amt für Statistik und Stadtforschung, 1989)

以上みてきたように，1980年代のアルトブルックハウゼンでは，ドイツ人とトルコ人との間の交流を深めようという努力がなされなかったわけではないが，全体として，両者の間の交流はますます希薄になる方向にあった，と言えよう。実際，トルコ人がトルコ人たちだけの間で固まるようになり初めたのは1980年代半ば頃からである，と前述のBIB活動家だった人は筆者に語った。BIBに積極的に協力していたトルコ人教師ですら，彼らが彼の家庭を訪問して話をするときには，その奥さんをそこから遠ざけたとのことである。

4. おわりに

本稿の冒頭で紹介した，2つの差別概念理解に基づいて，ブルックハウゼンで展開したドイツ人と外国人との関係をどのように総括できるだろうか。

まず言えることは，ホスト社会にとって，移民の数がごく少数である限りにおいては，偏見が発生しにくいし，それゆえ差別も発生しにくい，ということであろう。しかし，移民が日増しに増え，いずれホスト社会の住民の人口を凌駕するかもしれないという不安が現れる頃に，慣習の違いをきっかけとして偏見が生まれやすいと言える。しかし，それが直ちに差別に直結するわけではない。

差別は，そのようにして偏見を持った者が，経済的情勢の故に不利な立場に置かれたと感じたときに，その不利をもたらした張本人は移民であるとして，つまり移民をスケープゴートとして矛先を向けることから発する。なぜ移民を差別するかといえば，移民がより弱い立場にあるがゆえに攻撃

しやすいからである，と考えられる。その立場の弱さは，ドイツの既存の社会構造の中で，どの階層に移民が組み込まれたかによって決定される。その際に，ドイツの市民権を有しないということが，立場の弱さを増幅させると考えられる。また，雇用する企業とどのような契約を結んで来独したか，という事情もその弱さを増幅させる。

以上のことをリアルに認識していたヘーン牧師やフォークトレンダー牧師補は，移民たるトルコ人を差別したことはない。記録の限りでは偏見をもっていた様子もない。それどころか，トルコ人とブルックハウゼンのドイツ人との間の連帯を構築しようと努力していたと言える。しかし，すべてのブルックハウゼン住民が，ヘーン牧師のように認識していたとは限らない。逆に，1980年代初めになると，明らかにトルコ人に対するブルックハウゼンに住むドイツ人の側からの偏見が大きくなっていた，と言える。差別という行為に及ぶ者も現れるようになった。本論では言及しなかったが，1980年代初めという時期は，ドイツのみならずヨーロッパが。第2次世界大戦以降，最大の不況に直面し，失業率も高騰し，ユーロ・ペシミズムと呼ばれた閉塞感に包まれていた時代であることを想起すべきであろう。

この時期には，明らかに差別の重層性が顕在化していることを見て取ることもできる。それは，なによりも，外国人排斥をうたう政党への支持率が，ブルックハウゼンのドイツ人の場合，他と比べて特に高い，という投票行動に見てとることができる。ドイツ人の社会的弱者は，ドイツの社会構造の中で，有限の資源の享受からかなりの程度，排除されているとみてよい。彼らのために残されているわずかな資源が，移民によって奪い取られるという恐れが，彼らをして移民に対する差別という行動をとらせることになるものと考えられる。また，ブルックハウゼンの裁縫教室でのドイツ人による優先権の主張も，差別の重層性を意味している。しかし，この重層性は，ドイツ人の社会的弱者と移民の間にだけみられるものではない。移民自身のなかにも，それは存在している。これがよりはっきりするのは，

1990年代のことである。それについては別稿で論じたい。

付記：本稿は，法政大学在外研修員及びアレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究員として，1995年度にデュースブルク大学を拠点として行った調査研究，及び森廣正法政大学経済学部教授を代表者とする平成9年度文部省科学研究費補助金（基盤研究（B）(2)）（課題番号：09430010）による「国際労働力移動における地域ネットワークの形成と政策課題に関する国際比較研究」の成果の一部である。なお，本稿の作成のために，私学振興財団と法政大学の助成による学術研究プロジェクト「国際労働力移動のグローバル化と外国人定住」（研究代表者:森廣正教授）も利用した。

《注》

1) Freeman（1986）の所説については，山本（1996，pp. 200-204）を参照されたい。

2) 基礎学校に通う外国人の子どもを合計すると，254人になる。記事の数値に間違いがあることになるが，いずれにせよ，40数％の外国人比率であったことは確かであろう。

3) 筆者は，1977年6月からドイツに留学したことがある。その際，ドイツ語研修を受けるために住んだ南西ドイツの片田舎の町で，昼間から中学生から高校生の年齢と思われる子どもが数人空き地にたむろして，煙草を吸っているのを目撃したことがある。ビールを飲む子どもを目撃したこともある。いずれもドイツ人だったが，1970年代後半のドイツでは，片田舎の町ですら，そのような光景は決して珍しいものではなかったと，言えよう。そう考えれば，労働者の町ブルックハウゼンで福音派教会の施設を利用して開かれるディスコが，飲酒なしに運営されたということは，むしろ驚異ですらある。

4) 筆者の聞き取りによれば，トルコ人第2世代として看護婦をしている女性である。

5) Halk eviというのは，アタチュルクの時代によく使われた言葉であり，トルコ人女性にとっては，国際云々という名前よりも安心感があり，近づきやすい。宗教団体ではもちろんないし，政治団体でもない。社会的な交流を深めるための団体である。

6) この点については，山本（1997b）を参照されたい。

文　献

新保　満（1972）:『人種的差別と偏見—理論的考察とカナダの事例—』岩波書店。

山口節郎（1996）:「特権集団と差別構造—システム理論と閉鎖理論の応用的見地から—」，栗原 彬（編）『差別の社会理論』弘文堂，pp. 30-44。

山本健兒（1996）:「国際労働力移動のメカニズム」，法政大学比較経済研究所・金子勝(編)『現代資本主義とセイフティネット』法政大学出版局，pp. 183-220。

山本健兒（1997a）:「20 世紀初頭におけるルール地域鉱工業都市のポーランド人—デュースブルク市ハンボルンの都市化と移民マイノリティの居住パターン—」，『経済志林』第 65 巻第 1 号，pp. 45-109。

山本健兒（1997b）:「ドイツ・デュースブルクにおける外国人ゲットー化と都市計画」，『地理学評論』第 70 巻，pp. 775-797。

山本健兒（1998）:「スラム化・ゲットー化街区の再活性化をめぐる市民運動—1970 年代ドイツ・デュースブルクの問題地区－」，『経済志林』第 66 巻第 1 号，pp. 45-108。

Amt für Statistik und Stadtforschung: Europawahlergebnisse (18.06.1989) für den Kernbereich Bruckhausen.

Arbeitsergebnisse "Praxisprojekt" in 1979 und 1980 an dem Sozialpädagogisches Seminar der Gesamthochschule Duisburg. デュースブルク大学社会教育ゼミナールの Dr. Thomas Rommelspacher 所有資料。

BIB die bürgerinitiative bruckhausen informiert, Nr. 5, 1977.

BIB die bürgerinitiative bruckhausen informiert, Nr. 6, 1977.

BIB die bürgerinitiative bruckhausen informiert, Nr. 10, 1977.

Bild vom 16.6.1981: Gastarbeiter wie: Yussuf und Olmo.

Esser, Hartmut (1983): Auslnderintegration im Ruhrgebiet. Sozialökologische Bestimmungsfaktoren. Sozialökologische Bedingungen der Eingliederung auslndischer Arbeitnehmer im Ruhrgebiet (am Beispiel der Stadt Duisburg). Untersuchung im Auftrag der Stadt Duisburg und des Kommunalverbandes Ruhrgebiet (KVR) durchgeführt am Rhein-Ruhr-Institut für Sozialforschung und Politikberatung (RiSP) e.V.. Projektleitung: Prof. Dr. Hartmut Esser, Projektführung: Dipl.-Soz. Bernhard Hill, Dipl.-Geogr. Georg v. Oepen.

Evangelische Kirche in Duisburg (September 1982): Der Abstieg Bruck-

hausens ist kein Türkenproblem. Kein Miteinander zwischen Ausländern und Deutschen/Auf Mithilfe von außen angewiesen.

Freeman, G.P. (1986): Migration and the political economy of the welfare state, in: *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 485, pp. 51–63.

Höhn, Michael und Voigtländer (1979): Bericht zur Lage und Situation in der ev. Kirchengemeinde Duisburg-Bruckhausen, S. 20, Stadtarchiv Duisburg: S. 2191.

Höhn, Monika (1983): *Die Luft, die wir atmen. Aufzeichnungen einer Pfarrfrau aus dem Ruhrgebiet*, Damnitz Verlag im Verlag Plambeck & Co. Druck und Verlag GmbH, Neuss & München.

NRZ vom 24.12.1973: Richtungsweisendes Experiment in Bruckhausen. Heimat für alle: Viele Nationen unter einem Dach.

NRZ vom 15.3.1980: Weil es mit der Integration nicht klappt: Bruckhausen: Gemeinsam Veranstaltung mit den Türken.

NRZ vom 1.4.1981: Liegenschaftsamt prüft noch. Türken legen in Bruckhausen Kleingärten an.

NRZ vom 22.10.1985: "Ganz unten" klagt die Leiharbeit bei Thyssen an. Wallraff-Buch löste hektische Aktivitäten aus.

Protokoll der BIB-Sitzung vom 28.3.78.

Protokoll der BIB-Sitzung vom 18.4.78.

Protokoll der BIB-Sitzung vom 12.9.78.

Protokoll der BIB-Sitzung vom 19.9.78.

Protokoll der BIB-Sitzung vom 26.9.78.

Protokoll der BIB-Sitzung vom 3.10.78.

Protokoll der BIB-Sitzung vom 2.10.79.

Protokoll der BIB-Sitzung vom 25.11.80.

Protokoll der BIB-Sitzung vom 27.4.82.

RP vom 11.10.1975: RP-Serie über den Stadtteil Bruckhausen IV (ママ). Ganze Straßenzüge sind fest in der Hand der Ausländer. Gastarbeiteranteil steigt auf ein Drittel.

RP vom 18.10.1975: RP-Serie über den Stadtteil Bruckhausen VI. Noch der Hochzeit schnell aus dem Ort. Mehr Ausländer als Einheimische gezählt.

RP vom 22.7.1987: Wohnungsgesellschaft bestreift Abrißpläne. Bruckhausener Mieter sind verärgert.

RP vom 16.8.1989: Nachbarschaftstreff Bruckhausen hilft sozialschwachen Menschen. "Wohnzimmer für alle".

WAZ vom 2.3.1979: Prozentsatz soll nicht mehr steigen. Die CDU fordert Stop für Ausländer in Bruckhausen. Bestandsgarantie für 15 Jahre bestätigt.

WAZ vom 23.2.1980: Angebot in Bruckhausen: Deutsche lernen Türkisch.

WAZ vom 29.4.1980: Kein Platz in Beeck und Bruckhausen. Türkische Kinder sollen nun in Walsum zur Schule. "Nur" Vorbereitungsklassen sind davon betroffen.

WAZ vom 28.1.1984: Anders als in Hüttenheim. Keine Abwanderung aus Bruckhausen.

WAZ vom 31.1.1984: CDU setzt eigenen Arbeitskreis ein. Türkenabwanderung alarmiert Politiker. Vorsitzender Dr. Kämpgen: Duisburg braucht Türken.

WAZ vom 22.10.1985: Staatsanwalt ermittelt. "Ganz unten" klagt auch Leiharbeit bei Thyssen an.

WAZ vom 6.3.1986: AB-Maßnahme in Bruckhausen-Prüfung möglich. Café Lichtblick gibt jungen Frauen Hoffnung auf einen Job.

WAZ vom 21.5.1987: Bruckhausen: Kaum noch Schulanfänger schulreif. Das Projekt Ganztagsschule lindert soziale Nachteile. Leistung steigern—Schule und Freizeit verbinden.

WAZ vom 23.5.1987: Bruckhausen: Treffpunkt fördert die Begegnung Deutscher mit Türken.

WAZ vom 14.7.1987: Stadtteil-Fest in Bruckhausen. Nachbar-Treff "Dicke Luft" kann gute Erfolge aufweisen. Ladenlokal in Schulstraße sucht noch Sozialarbeiter.

WAZ vom 22.7.1987: Mieterinitiative in Bruckhausen gegründet. Bewohner der Dieselstraße fürchten den Abriß-Bagger. Thyssen dementiert: "Keine konkreten Abrißpläne".

WAZ vom 7.9.1987: Miteinander der Bruckhausener Bürger fördern. Das türkisch-deutsche Fest setzt ein positives Zeichen.

WAZ vom 19.9.1988: Gegen die Trennung durch Unwissenheit und Vorurteile. Das Volkshaus eint Menschen unterschiedlicher Kulturen.

WAZ vom 19.6.1989: Europawahl-Ergebnisse einiger Nordstadtteile: Rechtsradikale legen zu.

Wochen Anzeiger vom 27.5.1987: Nachbarn eröffnen Lokal in Bruckhausen.

付記：*NRZ: Neue Ruhr Zeitung*
RP: Rheinische Post
WAZ: Westdeutsche Allgemeine Zeitung